

【著作権について】

- ・著作権はすべて作者である梅井ゆえに帰属します。
- ・ダウンロードした作品は無料で閲覧いただけます。
- ・非公開で突破的に使用される場合のみ、連絡不要かつ無料でお使いいただけます。
- ・右記以外で本作を使用されたい場合は、使用料の有無にかかわらず梅井ゆえまでご連絡ください。
ご連絡の際は、梅井ゆえのメールアドレス (Mail:umeiyue54@gmail.com) をお送りください。
- ・使用方法・料金等の詳細は、梅井ゆえウェブサイト (<https://script.umeiyue.website>) のガイドラインをご覧ください。

「比良坂病院・旧隔離病棟9階の話」

梅井ゆえ

【登場人物】

- ・ 関川アンロック（セキカワアンロック）.. 幸の薄い心霊系配信者。
- ・ 宮杜螢志（ミヤモリケイシ）.. 心霊スポットに来た人を脅かして人払いをすることを職業にしている。半信半疑だが護身のため除霊術も少し勉強している。
- ・ 姫里双葉（ヒメサトフタバ）.. 超恋愛脳夢女子なホンモノの幽霊。

比良坂病院入口。関川が恐怖に震えながら、カメラと向かい合っている。

関川 「み、皆さんは、『比良坂病院』をご存じでしょうか。心霊や怪談好きでもコアな方なら知っている廃病院ですね。その旧隔離病棟9階にあるナースステーションへ行つた人間は、必ずと言って言いほど『女性に追いかけられた』と話します。私の知り合いの靈媒師いわく、ここで無念の死を遂げた若い女性が、今も道連れにする相手を探していることがあります。今までに数多くの靈媒師が除霊に臨んでいますが、未だに心霊現象は治まつております。……今日はそんなわくつきの病院へ潜入します。

ひつ！……おわかり……いただけたどろか……。今も病院の中から、女性の鼻歌のような明るい声が聞こえてきました。まるで今から病棟内に入る私を心待ちにしているかのようです。皆さんどうか、私の無事の帰還を祈つていてください。」

旧隔離病棟9階ナースステーション

宮杜 「おー、寒つ。依頼主から指定された場所は、『旧隔離病棟9階にあるナースステーション』。ここで間違いないか。にしても、こんな寒い時期にも肝試しに来る奴つて物好きだよな。」

姫里 「きや！」

宮杜 「おわ！！ 脅かすなよ。」

姫里 「え……？ わたしのこと、見えるんですか！」

宮杜 「いい、いい、いいくて、そういう鉄板の。俺もさ、同業だから。」

姫里 「ドウギョウ？」

宮杜 「大丈夫、俺、分かってるから。君、ここに肝試しに来た人間を脅かして、追つ払つてゐんでしょう。格好もソレっぽいし。」

姫里 「まあ……。結果的には……？」

宮杜 「ほらほら。俺もその口だからさ。」

姫里 「はあ……？」

宮杜 「ま、仲間同士、よろしく。」

姫里 「……よろしくお願ひします。ふふつ♡」

宮杜 「ん？」

「数十年前から！？」

姫里 「ダメですか？」

宮杜 「いや、ダメじゃないですけど……。結構若く見えるけど、年上かな……？ って、いつまで握手ってるの？」

姫里 「望んでないから！」

姫里 「あら、連れない人。」

宮杜 「あ、面倒くさい人かも……」

姫里 「なにか、のたまい遊ばして？」

宮杜 「いえ、なにも。じゃ、俺はこれで……」

姫里 「えー。離れたくないです。しくしく。」

宮杜 「とりあえず住み分けしない？」

姫里 「どういと？」

宮杜 「だから、もし人がきて脅かすとなると、二人いたら人間ってバレる可能性が高まっちゃうでしょ。まして、エレベーター前のナースステーションなんて、隠れられる場所少ないし。」

姫里 「わたしは問題ないと思ひますけれど。」

宮杜 「俺は問題大有りなの！」

姫里 「まあ！ そんな大声を出しては見つかってしまいますわ。」

宮杜 「どの口が言つてんだか。」

姫里 「仕方ありませんわね。分かりましたわ。」

宮杜 「分かってくなら結構……つて、もういない。さすが数十年のプロつてところ……か？」

遠くから関川の情けない叫び声が聞こえる。

関川 「ああああああ～～！」

宮杜 「來た來た。くくく……」

旧隔離病棟9階。非常階段の方から関川が走つてくる。

関川 「うあああああ～～～！ はあ、はあ、ここまで来れば……」

宮杜 「ふふふふふ。お注射の時間ですよ……。」

関川 「あつ……（氣絶）」

宮杜 「つて、お～い！」

姫里 「氣絶してしまいましたわね。」

宮杜 「わっ！ いきなり出てくんな。」

姫里 「仕方なくつてよ。この方を追いかけて來たのだもの。で、この方、どうしますの？」

宮杜 「どうするつて……このままだと、風邪をひいてしまうし……」

関川 「んがつ！ はあ、はあ、はあ……。わああ！」

宮杜 「あー、ごめんごめん。俺、人間だから。脅かしてごめん。いや、脅かすために來ているんだけども……」

関川 「助けてください！ このままだとロリータの幽霊に殺される～。」

宮杜 「はああ？」

関川 「い、今、階段の方に……！」

宮杜 「いいから、落ち着いて。君、誰？ なんでここに來たの？ 順番に話してみて。」

関川 「はあ……。私はいわゆる心霊系配信者というやつで、噂の心霊スポットへ行つては心霊現象を動画に収めてネットにアップしているんです。今日も、以前から話を聞いていた

この病院に、心霊現象を撮りに来ました。」

宮杜 「なんで、失神するほど怖がりなのに、そんなことやつてるの。」

関川 「そこが売りなんです。どうも怖がつていてる私の様子が視聴者に受けているようで。怖いのは嫌ですけど、撮影を乗り越えた後の達成感も好きで続けてるんです。」

宮杜 「君、ドMって言われない？」

関川 「言われたこと無いです。」

宮杜 「真面目に答えなくていいよ！で、なんで、さつき叫びながら走つて来たわけ。」

関川 「旧隔離病棟9階のナースステーションの話は知っていますよね。私もその噂を聞いてここに向かっていたんです。そしたら、非常階段でここへ上つて来る途中、ふと後ろで、カツン：カツン：カツン…とヒールの鳴る音が聞こえた気がしたんです。怖いなあ怖いなあ怖いなあ怖いなあ…と思いながら、後ろを振り向くと……」

姫里 「おはよう遊ばせ、愛しのハニ～！」

関川 「出たあー！」

宮杜 「お前かよ！」

姫里 「あら、酷いですわ～。」

宮杜 「大丈夫だから。こいつも人間だから……」

関川 「あんた、分かんないのか！？」

宮杜 「は？」

姫里 「わたしは、どうの昔に人間ではなくつてよ。」

宮杜 「へ？」

関川 「はあ。」

宮杜 「え？」

姫里 「ふふ♡」

宮杜 「ええええ！！？！」

姫里 「もう、鈍感さん♡」

宮杜 「やめろー！触るなー！くわばら！くわばら！」

姫里 「あ、熱いっ！なんですの、これ。」

宮杜 「清め塩！」

関川 「塩つて本当に効果あるんだ！」

姫里 「ストップ！ストップ！そんなんじゃ、私は成仏しませんわ！」

関川 「もしかして、噂になつてている幽霊つて……」

姫里 「私のことなんぢやないですの。まあ、病院には私以外にもいますけど、9階といえば私はおりませんもの。」

関川 「やつぱり……。」

宮杜 「ちょっと待つて、最初会つた時、『数十年ここにいる』って言つたよね。」

姫里 「はい。」

宮杜 「じゃあ、これまでいろんな靈媒師が來たけど、そのどの儀式でも成仏してないつてこと？」

姫里 「そういうことになりますわね。」

関川 「うわあ。ど、どうか、私のことは道連れにしないでください。」

姫里 「道連れ何も、私にそういった力はなくつてよ。」

関川 「良かつたー。」

宮杜 「じゃあ、なんでここに来た人間を襲つてるの？」

姫里 「襲つているだなんて、人聞きの悪い。……私、『キュンキュン』を求めていますの！」

関川 「は？」

宮杜 「は？」

姫里 「私は生前、免疫が弱く、すぐに感染症に罹つてしまふ質(たち)できたので、人生の大半をこの病院で過ごしました。長く付き合える友達もなかなかない、そんな私の唯一の楽しみといえば……少女漫画でした！」

宮杜 「え、だから、その口調？」

姫里 「あの少女漫画にあるような『キュンキュン』を知るまでは、死んでも死にきれない！ そう最期に思いながら息を引き取つて、気が付いたらここに居ましたの。」

関川 「なるほど、その強い思念が魂を留まらせて、あなたを地縛霊にしたのか。」

姫里 「私を成仏させるのは、私をキュンキュンさせる、愛の力だけなのですわ！だから、運命の相手を探し求めて、ここに来た方にちょっと声を掛けていますの。」

関川 「そうだ。」

宮杜 「そうだ。」

関川 「そうだ。」

宮杜 「そうだ。」

姫里 「そもそも私のことが見えない方が大半ですので、見える方とお会いできると嬉しくつて、つい。」

関川 「そりや追いかけられたら、誰だつて怖いですよ。」

姫里 「わたしにだつて、成仏したいつて気持ちはありますのよ。そうですわ！ こうやつてお話をができてているのは、運命！ おふたりにはわたしの成仏を手伝つていただきますわ！」

宮杜 「お経なら唱えられるけど、宗派が違つたらごめん。」

姫里 「お経なんて、わたしにとつては何の意味もありませんわ。私に必要なのは、鎮魂歌(レクイエム)……『愛の鎮魂歌(レクイエム)』ですわ！」

宮杜 「うわ……」

関川 「すでに、胸やけがしそうだ……」

姫里 「では、あなた。」

関川 「私！？」

姫里 「ええ、だつてお声が好みなんですもの。さつきの絶叫も捨てがたいくらいにキュンキュンしましたが……ぜひとも、私が今から言う台詞をあなたの声で聴きたいのですわ。」

関川 「は、はあ……。」

姫里 「コホン。『君の目を奪う薔薇の花や、僕よりずっと君の近くにいられる首飾りの宝石にさえ苛立つてしまう。この感情を嫉妬だと教えてくれたのは君だよ。永遠に、傍に置いて

くれるかい？』……ですわ♡』

関川 「くつ、こんな小つ恥ずかしい台詞を……」

姫里 「ダメですか？」

関川 「いえ、何でもないです。」

宮杜 「ふふ、くく……」

姫里 「熱く見つめ合つて告白されるのが夢でしたの。お願ひ？」

関川 「（物凄く嫌そうに、やつつけて）き、君を奪う……薔薇や、ずっと近くに、君の近くにいられる……宝石？ にさえ苛立つてしまふ……。この感情を嫉妬だと教えてくれたのは……君だ……。永遠に、傍に置いてくれるかい？ ……。」

姫里 「ん～！ ちょっと、いや、大分我慢したけど、ダメですわ！ 全つ然、なつていませんわ！」

宮杜 「ちゃんとやれよー。気合見せろー。」

関川 「外野だと思って……！」

姫里 「そうですわね。あなたの方が器用そうなのでお手本を見せてくださいかしら。」

宮杜 「は？」

関川 「ふふふ、ヨロシクオ願イシマース。」

宮杜 「なんで幽霊相手につ！ 彼女にもこんなこと言つたことないんだぞ！」

関川 「練習、練習ー。帰つたら言つてあげてー。（笑）」

宮杜 「先週フラれたわ！ クッソ。お前がちゃんとやってたら、俺まで言わされる羽目にはなつてないんだよ！」

「あんたこそ、この人を成仏できるような能力持つてたら良かつたじゃないですか。靈媒師でしょ！」

宮杜 「ああん？ 俺は靈媒師じゃないつうの！ 俺が仕事で祓うのは、心靈スポットにたかるニ・ン・ゲ・ン！」

関川 「今、心靈系の配信者を全員敵に回したな！」

宮杜 「黙れ、不法侵入者！ 俺は土地の所有者から依頼を受けてるから、公認なんですよ！」

姫里 「私のために争わないで～！」

関川 「さつさと成仏しろ！」

宮杜 「かくなる上は、もう強硬手段だ。」

関川 「いつたいどこからそんな大きな剣を、」

宮杜 「祓い給い、清め給え、神ながら守り給い、幸(さきわ)え給え。これでお前を討つ！」

姫里 「きやーーー！」

関川 「ちょ！ ちょっと落ち着いて！」

宮杜 「止めるな！ こいつは害悪だ！ 現世(うつしよ)から消し去つてやる！！」

関川 「うわあああ！」

姫里 「その熱い視線！ とてもイイ！ イイですわ！！ キュンキュンしますわあああ～～！」

宮杜「ふんっ！（剣を振り下ろす）」

関川「え……」

宮杜「え……」

関川「成仏……した？」

宮杜「ラブ・イズ……オーバー……」

関川の配信動画。

関川「これがあの比良坂病院で、私が体験した心霊現象の一部始終です。おわかり……いただけただろうか……？ 多くの方には、私達が2人で騒いでいるように見えるでしょう。しかし、靈感をお持ちの方には、私達の他にもう1人いる様に見えるそうです。

さて、比良坂病院旧隔離病棟9階では、これ以降心霊現象はパツタリとなになつたそうです。信じるか、信じないかは、あなた次第。それではまた、次の心霊スポットでお会いしましよう。」

（終わり）

【著作権について】

- ・著作権はすべて作者である梅井ゆえに帰属します。
- ・ダウンロードした作品は無料で閲覧いただけます。
- ・非公開で突破的に使用される場合のみ、連絡不要かつ無料でお使いいただけます。
- ・右記以外で本作を使用されたい場合は、使用料の有無にかかわらず梅井ゆえまでご連絡ください。（Mail:umeiyue54@gmail.com）
- ・使用方法・料金等の詳細は、梅井ゆえウェブサイト（<https://script.umeiyue.website>）のガイドラインをご覧ください。

